

KOYOMI SPECIAL

八
神
大
輔

STAY

(チケット、無駄になっちゃったね)

(無駄じゃないよ)

「少しかすれた彼の声の耳によみがえり、小夜美は頼杖をしたままため息をついた。」

「四回目」

「……え？」

「ため息。それで四回目だよ。どうかしたの？」

大学の図書館で、小夜美は休んでいた間のノートを友達に見せてもらっていた。しかし、すっかり手のほうがお留守になつてしまい、いつの間にか窓の外をぼんやり眺めていたようだ。

「あ、ごめんごめん。なんでもないのよ」

慌てて笑顔を作り、再びノートに向かう。けれど意識がどうしてもほかのことに向かつてしまい、小夜美の口からまた吐息が漏れた。

「五回目」

小夜美とゼミを同じくする彼女は、肩をすくめると、ノートを閉じてしまった。

「あ……ごめん、許して」

「これは貸してあげるから、持って帰っていいよ。今日はそんな気分じゃないでしょ？」

「ほんと？ ……ごめんね、ありがと」

ノートを鞆にしまう小夜美を、彼女は興味深げに見つめた。その視線に気づいて、小夜美が決まり悪げに首をかしげる。

「どうしちゃったの？ ひっさびさに学校出てきたと思ったら、ぼーっとしっぱなしでさ」

「え……そ、そうかな。今までのんびり過ごしちゃってたら、ギャップが……」

「こよみちゃん」

両手を組んでその上に顎を乗せ、彼女はやや上目遣いに小夜美の顔を覗き込んだ。心配しているというより、嬉しそうに目が輝いている。

「私の目はごまかせないよ？」

「……どういうこと？」

「恋、しちゃったんじゃないの？ 小夜美ちゃん」

「……！」

耳まで赤くなる小夜美。それを見て、彼女はここが図書館だということも忘れて、大笑いした。

「あー、凶星だあ。ゼミの男連中が聞いたら悲しむねー」

「ち……違うよ、そんなんじゃないってっ」

「じゃなくて？」

「じゃなくて……でも……そうなのかな……？」

「だんだん小夜美の声が細くなつていく。うつむいてしまった小夜美に対して、彼女はずっと身を乗り出した。

「悩んでるねー。よしっ、おねーさんが相談に乗ってあげよう！」

「……同じ年じゃないの……」

「細かいことは気にしないの。で？ なになに？」

*

「それって告白じゃないの」

「やっぱ……そう思う？」

強引さに押し切られたのと、やはり誰かに聞いてもらいたかったことがあって、小夜美はマリナーパークでの出来事を彼女に話して聞かせた。

小夜美と来られたのだから、チケットは無駄じゃなかった。智也のその言葉に対し、小夜美は曖昧に頷いただけだった。

のだが……。
 「なるほどね……。でも、その子、頑張ったよね。おねーさんは彼を応援してあげたいなっ」
 「え……。どういふこと？」
 「自分だってわかってるんでしょ？　酷なことしたって」
 「それは……」
 「その子は小夜美のことが好きなのに、ほかの女の子をデートに誘って、チケットあげちゃったんだもんね」
 「……」
 「でもそれでへこまないでさ、そのチケットで小夜美を誘うなんて、根性あるじゃない。私は好きだなー、そういう子」
 「もつ、他人事だと思って」
 無然とした顔で横を向いたのは、彼女に云われるまでもなく、わかっていたからだ。
 でも、あのときはほんとに、気づきもしなかった。ただ、弟の恋愛を応援してあげたいようなつもりで。そりゃあ、ちよつとだけ寂しかったけど……。
 「……歳下なんだよね」
 横を向いたままで、小夜美が呟いた。
 だから？と訊き返すように、向かいの席の彼女が首を傾ける。
 「歳下だから嫌だってわけじゃないんだけど……、三歳下っていうのがね……」
 「……弟さんのこと？」
 「……」
 目を伏せて、小夜美はうつむいた。そのまましばし沈黙が訪れる。
 小夜美の友達は背もたれに体を預け、三つ編みにした栗色の長い髪の手をまでもてあそんでいた。髪を下ろせばきつと素敵なのに、と小夜美はいつも思うのだが、彼女は「邪魔くさい」と笑い飛ばしてしまう。そうしながら、彼女は口を開いた。

「歳下って、めんどくさいよね」
 「え？」
 「基本的には甘えたいくせにさ、時には立ててあげないとすねるし。めんどくさいよ」
 「……」
 「でも、それは女のわがままかも。女も甘えたいし、甘えさせてあげたいもね。最悪なのは……」
 「？」
 「相手の目に映っている自分を憐れんだけって奴かな。まあ、これは相手が歳下だとかは関係ないけど」
 「……！」
 さりげなく吐かれた言葉に、小夜美は胸を衝かれる衝撃を覚えた。
 そう、それが怖かった。彼を見ていると、どうしても弟を思い出してしまふ。
 照れくさくて、弟には優しくなんてしてやれなかった。あの日も喧嘩したままで……逝ってしまった。
 あたしはその償いがたくて、智也のそばにいるのかもしれない。彼の本当の想いなんかおかまいなしで。
 「なーんて。私も偉そうなことは云えないんだけどね」
 小夜美がうつむいて黙りこくってしまったのを見て、彼女はわざとおどけて見せた。
 小夜美は黙って首を横に振り、小さく呟いた。
 「もつ……逢わないほうがいいのかな」
 「……」
 困ったように、眉をしかめる彼女。
 「さあ……それは私にはわからないけど」
 いったん言葉を区切ると、彼女は小夜美の顎に手をやって上を向かせた。少し驚いて小夜美が彼女の瞳を見つめる。瞳の中に映る自分。
 「小夜美は、彼を見つめるとき、誰を見てた？　自分？　弟さん？　それとも、彼自身？」

「それは……」
小夜美は彼女の手から離れて、目をそらした。またうつむいて、言葉を続ける。

「それは……」

繰り返したが、その続きは出てこなかった。

わからない。弟を重ねて見ていたのは確かだったが、果たしてそれだけだったかどうか。心なんて、あとからどうにでも説明をつけられるような気がする。

そんな迷いを見透かしたように、彼女は微笑んだ。

「わかんないならさ、ひとりですべてに決めるのはやめなよ。それこそ彼に失礼じゃない？」

「……」

「もう一度彼に逢って、彼の目の中の自分を見て、考えてみれば。…… あ、ごめん、私、もう行かなきゃ」

云いながら、彼女は立ち上がった。荷物を手早く片付けて、脇に置いたヘルメットを取る。

「ノートは次のゼミのときでいいから」

「あ…… うん、ありがと、たまちゃん」

「じゃね」

手を振って立ち去る彼女を見送ったあと、小夜美はまた大きくため息をついた。

「六回目、か」

自分で数えて、小さく笑う。そして荷物を片付けて、席を立った。

*

考え事をしていたら、一駅乗り過ぎしてしまった。そのままなんとなく降りてしまい、駅前の商店街をぶらぶらと歩く。気分転換にいいか、と思ったのだが、結局、考えるのは智也のことだけだった。

そのとき、視界をふと見覚えのある後姿が横切った。

「……嘘？」

あんまり考えすぎて、幻覚が見えたのかと思った。

違う。本物だ。こちらに気づいた様子もなく、智也が歩き去っていく。

考えるまでもなく、小夜美は走り出していた。

「智也くん！」

彼も考え事をしているのか、小夜美の呼びかけにも気づかないで、足早に歩いていく。人の流れにその姿を見失わないように、必死で目で追いながら小夜美は駆けた。

「智也くん！」

やっと追いついた。腕をつかむと、目を丸くして智也が振り向く。

「……小夜美さんだ」

「小夜美さんですよ。……もう、智也くん、歩くの速すぎるよ」

息を切らしながら答える。思わず、笑顔がこぼれていた。

「逢いたかったんだ」

そんな言葉が、自然と口をついて出てくる。

そう、逢いたかった。逢いたかったんだ、あたしは、智也くん……。

少し驚いた表情の智也を、小夜美はじっと見つめた。

瞳の中には、自分が映っている。そして自分の瞳には、智也が映っているはずだ。

そのことが、なぜだか無性に嬉しかった。

彼を傷つけてしまうかもしれない。だけど、だけど、彼のそばにいたい。彼とふたりで答えを出す、その日まで。

冬の気配をのぞかせる北風に吹かれながら、小夜美は、強くそう考えた。

了

あとがき

メモオフ、小夜美ねーさんシナリオ終了記念に勢いで書きました。エンディング見て、速攻で書き始めたのって初めて。一日で書き終わったのも初めて、かな。
今回も、実はすごい反則しています……って、そんなん読んだらもうバレバレ(笑)。
まあ、今回はお遊びってことで、勘弁してください。
このふたりはきつとこれからがすごい大変なので、その辺もいつか書けるといいなあと思います。
ご感想などいただければ、幸いです。

二〇〇一年三月一日

青春のリグレット

日曜日の黄昏時。澄空駅の前で、手をつないで立つ智也と小夜美の姿があった。

本当は智也はこないつ知り合いに会ってもおかしくない場所を手をつないでいるなんて、恥ずかしくてしようがなかったのだが、そうと知っているからこそ、小夜美は手を離さないのだった。

「遅くなっちゃったね。晩ご飯、どうする？ 今日もひとりなんでしょう？」

「そうだな……。でも、さすがに今日は早めに帰らないと、まずいんだろ？」

「うん……。正直云うと、そうなんだけどさ」

名残惜しそうに、小夜美が智也とつないだ手に視線を落とす。

智也が高校生である以上、平日のデートはどうしても夕方から夜になってしまう。智也はほとんどひとり暮らし状態だから問題はなかったが、小夜美のほうは自宅暮らし。いくら大学生だからとはいえ、若い娘の帰りが連日夜更けだと、さすがに親もい顔をしない。

そんな小夜美の葛藤を察して、智也はわざと明るく微笑んだ。

「俺もおばちゃんにパン売ってもらえなくなると困るしさ。……また明日、逢えるんだろ？」

「うん……」

不承不承、指を一本一本外していく小夜美。

そこへ後ろから声をかけられた。

「小夜美？」

「えっ？」

智也と小夜美が同時に振り向くと、ひとりの青年が目を見つめていた。

「歳は、小夜美と同じぐらいだろうか。二枚目と云っている。智也よりわずかに背が高かった。」

「やっぱり、小夜美か。久しぶり」

「……一城……くん」

小夜美の表情が硬くなるのが、智也にもわかった。ほどことうとしていた智也の手を、強く握ってくる。

それだけで、智也には何となくわかってしまったが、できるだけ平静を装って小夜美に尋ねた。

「知り合い？」

「う……。うん、高校の同級生……」

「……御堂一城です、よろしく」

その紹介のされ方にやや不満そうに見せながら、一城は智也に軽く頭を下げた。

智也もその目を見返しながら、会釈する。

「三上智也です」

「三上くん……。ね。こよ……。霧島とは、どういう？」

「彼よ」

智也が口を開くより早く、小夜美が答えていた。智也にぴたりと寄り添い、一城をきつい視線で見つめている。その姿は、怯えているようでさえあった。

「へえ……。それは邪魔したな」

一瞬、驚きの表情を浮かべたものの、すぐに一城は屈託なく笑った。智也には特に悪意は感じられなかったが、それでも小夜美は硬い顔をしたままだった。

「久しぶりだからお茶でも、と思ったんだけど。じゃあ遠慮しとこうか」

「いや、俺はもう帰りますから」

思わず、智也はそう答えていた。余裕のあるところを見せたい、という子供っぽい見栄があったのかも知れない。だが、目の前の男が、そう悪い人間にも見えなかったのも確かだっ

「た。智也!？」

小夜美が驚いて、智也を見上げる。智也は微笑んで見つめ返した。

「久しぶりなんだろう？ せっかくだから、ゆっくりしてこいよ」

「でも……」

「大丈夫だよ」

ぼん、と智也は軽く小夜美の頭に手を乗せた。それだけで小夜美は気持ち急になつたような気がして、智也の手をそっと離れた。

「それじゃ。失礼します」

「悪いね」

「あとで……電話するね」

「うん」

手を振りながら、智也は改札を抜けた。その姿が人波に飲まれて見えなくなるまで、小夜美はじつと見送っていた。

そして一城も、そんな小夜美を促すでもなく、そばに立って待っていた。

*

「卒業以来だから……ほとんど二年ぶり、かな」

「そうね」

駅前の喫茶店に入っても、小夜美は硬い表情のまま、言葉も少なかつた。

一城は苦笑しながら、言葉を続けた。

「智也くん、だっけか。小夜美があんな子供とつきあってるとは、ちよつと意外だったよ」

少しからかうような口調だった。

小夜美は珈琲を一口飲むと、呟いた。

「大事にしてくれるわ」

カップから顔を上げて、一城のほうを見る。きつい視線の

ままで。

「あたしも、大事に想ってる」

「……そうか。ならいいんだけど」

ほとんど喧嘩腰の小夜美の態度に腹を立てた風もなく、一城は穏やかに微笑んだ。

その笑顔が懐かしい何かを思い出させるようで、慌てて小夜美は目をそらした。

「でも、俺だって、今でも小夜美のことを大事に想ってるぜ」

「……え？」

弾かれたように、小夜美が顔を上げた。一城の真剣な眼差しを受けて、心臓が高鳴ってしまう。

今更……今更、何を云い出すつもりなのだろう？

一城は真剣な表情のまま小夜美の前に手を差し出し、人差し指と中指を立てた。

「小夜美は、俺にとって二番目に大切な女だ」

「……」

小夜美が大きいため息をつく。頭を抱えつつ、上目遣いに軽く一城を睨んだ。

「……で、一番と二番の差はどれくらいあるのかしら？」

「そりゃちよつと言葉では表現しづらいな」

腕組みをして、首を傾げる一城。小夜美はついに吹き出してしまった。

「……まったく……全然変わってないのね」

肩の力が抜けて、自然と笑みがこぼれる。

その笑顔を見て、一城はまた優しく微笑んだ。

「やつと笑ってくれたな」

「……え？」

「ずっとこーんな怖い顔してるからさ。びびったぜ」

両手で目の端をつり上げて見せる一城。小夜美は頬を膨らませて答えた。

「失礼ね。そんな顔してないよ」

「いや、してた。迂闊なこと云うと、殴られるかと思った

よ」

「……バカ……」

苦笑しつつ、小夜美はガラス越しに外を眺めた。高校生ぐらいのカップルが歩いているのが見える。その姿を目で追いつながら、小夜美は呟いた。

「笑って話せるようになることなんて、絶対ないって思ってた」

「……」

「だって、そんなの悲しすぎる。あんなに苦しんで、あんなに

……」

愛したのに。そこまでは小夜美は口にしなかった。

面に浮かんだ憂いを振り切るように、一城の目を見ながら、小夜美は微笑んだ。

「でも、そうじゃないんだね」

「……そうだな」

相変わらず穏やかに、一城は笑顔を見せる。

ああ、この笑顔が好きだった。そんなことを静かに考えられる自分に少し驚きながら、小夜美は珈琲をもう一口飲んだ。

*

三十分ほどで、ふたりは喫茶店を出た。

「それじゃ。デートの邪魔して悪かったな」

「ほんっと。次からは遠慮しなさいよね」

屈託のない笑顔でそう云ったあと、小夜美は真顔になった。

今なら、云えるかもしれない言葉。

「瑞穂は……元氣？」

「……ああ。俺が小夜美に会ったって云ったら、残念がるだろうな」

「大事にしなさいよ」

「してるよ」

何のてらいもなく答える一城の姿に、今度はほんの少し、小夜美の胸が痛んだ。

けれどそれが、一城なりの思いやりだとわかっていただけから、とっておきの笑顔を浮かべた。

「今度、電話するって……瑞穂に、伝えといて」

「OK。……ありがとな」

一城の瞳に、一瞬、隠しきれない憂いが走る。小夜美は目をそらしてそれを見ないようにした。

「じゃあ、またね」

「ああ、また今度」

軽く手を振って、ふたりは別れた。友達同士のような、当たり前前の挨拶を交わして。

小夜美は家に向かって歩いていったが、ふと立ち止まると、駅のほうに引き返した。

携帯電話を取り出して、リダイヤルを使って何度もかけた番号にダイヤルする。

短い呼び出し音のあと、すぐに相手は電話に出た。

「あ……智也？ うん、あたし……。え？ もう終わったよ……」

「なあに、やっぱり妬いてたの？ ……無理しちゃって。ふふ、はいはい……ねえ、やっぱり今からそっちに行つて

いいかな？ 逢いたいんだ……」

了

あとがき

ユーミンの歌です。「笑って話せるの それはなんて哀しい」というフレーズがすごく好きなので。小夜美ねーさんは後悔してるわけではないので、心情はかなり違いますけど。小夜美ねーさんって、意外と昔、大失恋してるんじゃないかなってふと思ったのがきっかけです。あと、実は小夜美ねーさんのうれし恥ずかしセーラー服時代(笑)のお話書けないかなあと考えてまして、そのテストケースでもあります。いつか書けるといいな(いつだ)。ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一年四月一三日

Happy, Happy Birthday

「だから、この場合はこの公式を代入すればいいわけよ。わかる？ それで……」

涼やかな声を聞きながら、智也は小夜美の横顔を見ていた。

小夜美は眼鏡をかけている。特になくても困らないが、勉強するときなどは使っているそうだ。

これはこれで新鮮でいい……などと智也が考えていると、白い細腕がすっと持ち上がり。

「あたっ！」

智也の額に、裏拳が見事にヒットした。

「もう、聞いているの？」

「聞いているって……ひでえな、暴力教師」

「ぼけーっとしてるのが悪いんですよ。はい、じゃあ次はここやつてみて」

「ちよっと休もうぜ」

「さっき休憩したばかりじゃない」

「だあ……世間はゴールデンウィークだっていうのに……」

智也は大きく伸びをして愚痴をこぼした。

今年は五月一日・二日が土日当たり、学生にとっても大型連休になっていたのだ。今日はその中盤、五月二日になる。

そんな智也を小夜美は、あきれつつも微笑んで見つめた。

「受験生には連休なんて関係ないの」

「受験本番は夏休みからだろ」

「それじゃ間に合いそうにないから、こうやってあたしが教えてるんじゃない」

眼鏡をとり、小夜美は大きいため息をついた。眉を寄せ、智也を軽く睨む。

「智也の両親は、あたしを信用して任せてくれたんだから。今のあたしは、恋人じゃなくて家庭教師。甘えるんじゃないの」

「……ちえっ」

さすがにこれ以上ごねるとまずそうだ、と智也にもわかった。シャーペンを取って、問題集に向かう。

ついさっき厳しいことを云っておきながら、小夜美は微笑んでその姿を見守った。

小夜美が智也に勉強を教えるようになったのは、年が明けからぐらいだっただ。しかし、もともと大学が忙しい上、智也の勉強まで見ていては、小夜美はバイトをする暇もない。そんな話を智也が両親にすると、じゃあ正式に家庭教師としてお願いしよう、ということになったのだ。

智也にとっては願ってもないことだったが、ひとつ誤算だったのは、小夜美がビジネスはきっちりつけまを付けるタイプだったことだ。もちろん、智也の両親に不自信を持たれまい、という気負いもあっただろうが、智也にとってはかなり厳しい先生であることは間違いなかった。

「……でもさ、明日は遊びに行けるんだろ？」

ノートに回答を書く手を止めずに、ふと智也が口を開いた。そのポーズは一種の照れ隠しだったのかもしれない。

「明日？」

小夜美は意外そうな表情を作ろうとしたが、ついどうしても顔がほころんでしまった。智也が覚えていてくれたのが、嬉しかった。

「そう、明日……誕生日だろ、小夜美の」

ちらっと智也は小夜美のほうに視線を走らせる。しかし、はにかんだ笑顔で見つめられていることに気づき、慌ててノートのほうに顔を戻した。

「いいのよ、そんなの」

「よくないさ。だって、ほら……」

「？」

「つきあいだして……最初の誕生日……なんだからさ」

「智也……」

智也は赤面してうつむいたままだった。

小夜美は智也の横顔に顔を近づけ、頬に軽くキスをした。

「……！」

「ありがと。嬉しいよ、そういうこと大事にしてくれるの」

「小夜美……」

「楽しみにしてる」

満面の笑みを浮かべる小夜美。智也は思わず抱きしめそうになったのだが、

「だから、今日は明日の分も頑張ろうね」

「……」

その笑顔のままに云われてしまっただけは、勉強を再開するしかなかった。

智也はため息をついて、問題集との格闘を始める。小夜美は終始上機嫌だった。

*

小夜美を駅まで送っていった帰り道、智也は明日のことを考えていた。

「楽しみにしてるね」

別れ際、小夜美は笑顔でもう一度そう云った。

しかし、実は智也にはまだ具体的なプランがあるわけではなかった。それどころか、プレゼントもまだ用意していなかったのだ。

（どこ行こうかな……。思い出の場所といえばマリナーパークだけど……あそこはもう何度も行ったし……。やっぱりどっかいい店でディナーかな……）

定番通りのことを考えてみたものの、どんな店に行けばいいのか想像もつかない。信に訊いてみようか、と一瞬考えたが、そんなことをすればきっと連休明けには町中の噂になっ

ているに違いないので、やめておいた。

（それよりプレゼントか……。何がいいのかな。アクセサリーとかはあんまりつけてないけど……。でも、嫌いなわけじゃないだろう……。指輪とか……。喜ぶかな……。）

道行く人々が、不審そうに智也を振り返る。にやけているのだ、とは当人は気づいていなかった。

（……とにかく！ いつまでもガキじゃないってことをアピールするいいチャンスだ。よおおおおおし！）

妙な期待と高揚感で、智也は祝ってもらおう本人より興奮して、なかなかその夜は寝付けなかった。

*

翌日。智也は朝早く家を出て、街の宝石店に足を運んだ。

もちろん、そんなところに入るのは初めてだ。ドアをくぐるだけでも勇気がいったが、入ってからもおろおろと辺りを見回していた。

そんな智也の様子に目をとめて、店員の女性が声をかけた。

「いらっしやいませ。贈り物ですか？」

「あ、はい」

「どっいったものをお探しいたげよう？」

「えーと、指輪とか、いいかなと思って」

「指輪でしたら、こちらになります」

店員は智也をショーケースの一角に案内した。

きらびやかな輝きが並んでいたが、正直、智也にはどれがいいものなのかピンと来ない。

「お相手の方は、どんな方ですか？ お若い方？」

「あ、はい、今度二十一歳で……」

「なるほど。可愛い方ですか？ それとも綺麗な方かしら？」

「えーと、どっちかっていうと綺麗なほうだと思っただけ

「……でも、やることは子供っぽくって可愛いというか……」
 「……まあ、のるけちゃって」

店員がからかうように笑い、智也は耳まで真っ赤になった。
 (な……なにを云ってるんだ、俺は)

そういう客は珍しくないのだから、店員は智也の動揺に構わずに、いくつかの指輪をショーケースから取り出して見せた。

「こちらなどがどうでしょう？」

「うん……」

智也はそれらをざっと眺め、ある一点に目をとめた。

それはプラチナのリングに、小振りなダイヤを何点かはめ込んだ指輪だった。清楚な作りでありながら、豪華な輝きを放っている。小夜美の細い綺麗な指に似合うと思った。

「これ……」

智也が取り上げたその指輪を見て、しかし店員はわずかに眉をひそめた。

「そちらですか？ …… 八万七千円になります……」

「……」

智也は目を大きく開いて、店員の顔をまじまじと見た。店員も少し困ったような顔をしている。智也のような若者はつきり云えば子供だ、が買えるようなものではない、と思っているのだろう。

実際には、買えなくはなかった。智也は貯金を全部下ろしてきていた。

智也は息を飲んで、その指輪をもう一度見つめた。

小夜美の指に、きつと似合う。喜んでくれるだろう。そう思った。

「じゃあ、これを」

そう云って差しだそうとしたとき、智也の横からすつと美しい指が伸び、ほかの指輪を指した。

「あたしは、こっちが可愛いと思うな」

「……え？」

腰までかかる長い髪を揺らし、彼女が智也を見上げた。その微笑みを、智也は茫然と見つめた。

「ね」

「小夜美……」

「あら、ご一緒だったんですか」

店員が目丸くして、小夜美を見る。小夜美は笑顔で頷いた。

「ええ。…… ねえ、智也。あたし、こっちがいいな」

小夜美が指さしたのは、特に装飾のないプラチナの指輪だった。ただ微妙な曲線が美しいラインを作っており、小夜美の指にはめると栄えるだろうと思えた。

「う、うん」

智也はとりあえず、頷くしかなかった。

*

宝石店を出たあと、しばらくふたりは無言で歩いていた。

智也は無然とした顔で、小夜美は満面の笑顔で。

「やああって、智也が不機嫌そうに呟いた。」

「……どうして、小夜美があそこ？」

「偶然だよ。…… あ、ちよつと狙ったかな。朝、電話したらもういなかったから、もしかしてお買い物してくれてるのかも…… っと思っ、出てきちゃった」

「……」

「そしたら、案の定。…… ダメだよ、あんな高いもの」

困ったような笑顔で、小夜美は智也を見上げた。

智也は目をそらしながら答えた。子供扱いされるのが、悔しかった。

「…… だって、今日は特別な日じゃないか」

「……」

気がつけば、公園の入り口まで差し掛かっていた。小夜美は智也を促して、ベンチに座った。

「智也の気持ちはね、すっごく嬉しいよ。ほんと」

「……」
 「恥、かかせちゃったってこともわかる。ごめんなさい……ほんとに。でも、でもね、智也はまだ高校生なんだから……よくないよ、そういうの、やっぱり」

「俺は……」
 思わず智也は声を荒げそうになった。しかし小夜美と目が合うと、言葉を失った。

小夜美の目は、真剣だった。それは対等の立場で、本気で話そうとしている目。けして子供相手に諭そうとしている姿ではなかった。

「わかる。そうやって『高校生だから』って見られるのがいちばんイヤなのはわかっている。でも、それは本当のことなんだから、しょうがないんだよ。背伸びして無理して……そんな風にして、あたしとつきあってほしくない」

「小夜美……」
 「あたしは、今の智也が好きなの。高校三年生の智也が好きなんだよ？ それで来年は大学一年生の智也が、再来年は大学二年生の智也が好き……ずっと、『今』の智也が好きなの。……わかるでしょう？」

「……」
 智也は黙って頷いた。小夜美はそんな智也の頭を胸に抱き寄せた。

「……」
 「……」
 「でもね、ほんとに嬉しかった。ありがとう、智也」
 そう云って、小夜美は智也の頭を撫でた。
 結局、ガキ扱いしてるじゃん……智也は苦笑したが、不思議とイヤな気分ではなかった。

「……それじゃ、改めて」
 「え？」
 小夜美が智也の前に両手を差し出す。子供のような笑顔。「プレゼント。くれないの？」

「あ……」

智也はポケットから指輪の入った包みを取り出した。小夜美の手のひらにそっと置く。

「誕生日、おめでとう」
 「ありがとう」

小夜美は包みを一度胸に抱くようにしたあと、すぐ包装を開いた。指輪を取り出して、右手の薬指にはめる。シンプルなもの指輪は、小夜美のために作ったように似合っていた。小夜美は愛しげに、指輪に頬ずりした。

「可愛い。ありがとう、ほんとに」
 「いや……」

智也は照れて頭をかいた。小夜美は微笑んで、云った。
 「いつか智也が大人になって、いい男になって……そしたら、左手にする指輪を買ってね」
 「え……」

思わず真顔になって、智也も小夜美を見つめ返す。しかし、今度は小夜美が赤くなって背を向けてしまった。

「おい、今のどうい……」
 「さーて、これからどこに連れてってくれるのかな？ 高級ホテルでお食事？」

「……高校生らしくないことするなって云ったくせに……」
 「冗談よ。じゃ、高校生らしくお勉強しよっか。云っとくけど、あたし、『浪人の智也』は好きじゃないからね」

「ひでえ……」
 「じゃあ、明日からはちゃんとやること。今日は息抜きね」
 「OK……特別な日だもんね」
 立ち上がり、智也は小夜美の右手を握った。
 指に触れる指輪の硬い感触が、心地よかった。

了

あとがき

小夜美ねーさん誕生日記念です。
書いてるほうが恥ずかしいくらいラブラブですな(笑)。
冒頭、小夜美ねーさんが眼鏡をしているのは、ハビレスの影響
というわけではありません…たぶん(笑)。
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一年五月三日

Happy, Merry Christmas

空から、白いものが舞い降り始めていた。小夜美はふと窓の外に目をやり、そのことに気づいて目を丸くした。

「あ……」

「んー？」

問題集を睨んで頭をひねっている智也は、顔を上げず、声だけで反応した。その肩を、小夜美はばんばんと何度も叩いた。

「ちょ、ちよっと、智也！」

「な……なんだよ、小夜美」

「あれ、あれ見て、ねえ」

「だから、叩くな、痛いって……あ」

ようやく顔を上げた智也も、小夜美が指さすものに気づいた。

「雪だ……」

「イブに雪だなんて、ロマンチックだね……」

ほづ、と小夜美がため息をつく。

そう、今日は十二月二十四日、クリスマスイブだった。

恋人たちは、肩を寄せ合って、降り続く雪を眺めている。

そこで行われていたのはパーティではなく、受験勉強というロマンチックさとはあまりに縁遠いものだったけれど。

しばらく、二人は黙ったまま窓の外を見ていた。

だが、やがて小夜美が我慢できないように立ち上がり、智也の腕を引っ張った。

「外！ 外行こう、智也！」

「外あ!? こんなに寒いのに……雪降ってんだぞ！」

「だからじゃない! 雪の聖夜に、こんな美人とデートできるんだよ? すっごい幸せだと思わない?」

「だから、そういうこと、自分で云うなって……」

「男がうだうだ云わない! さ、早く早く。せっかくのクリスマスなんだから!」

……受験生にはクリスマスも関係ないって、自分で云ったくせに……」

ぶつくさ文句を云いながら、智也は立ち上がってコートを手を取った。不機嫌そうな表情を作ろうと、無駄な努力をしながら。

*

「すごいすごいすごい! 雪だよ、雪!」

「わかってるって。だから、このくそ寒い中、出てきたんだろ!」

「もう、ノリが悪いなあ、相変わらず。イブに雪が降るなんて、珍しいんだよ」

頬を膨らまして、小夜美が軽く智也を睨む。そんな表情をされると、智也はいつもこの恋人が自分より三歳年上だということ、忘れてしまっそうになる。

智也の苦笑をどう受け取ったのか、小夜美はあかんべをして、体を翻した。

「ゆーきやこんこん……」

「走ると転ぶぞー」

「平気だよー……きゃっ」

云い終わらない内に、小夜美は積もり始めた雪に足を取られて、転びそうになった。慌てて駆け寄った智也に、すんでのところで抱き留められる。

「云わんこつちやない」

「えへへ、ごめん」

そのまま智也が小夜美を立ち上がらせる。そうすると、自然と智也が後ろから小夜美を抱きすくめるような形になった。

「あ……」
 「ん？ どうした、小夜美？」
 「な、なんでもないよっ」
 慌てて小夜美は智也の腕から逃れて、今度は足下に気をつけながら歩き始めた。
 少し頬を赤くして沈黙してしまった小夜美を、智也は怪訝そうに眺めた。
 「どうかしたのか？」
 「なんでもないって……くしゅっ」
 笑顔で振り向くと同時に、くしゃみが出た。
 ほんっと、子供と一緒にだ。
 智也は微笑みながら自分のマフラーを外し、小夜美の首に巻いてやった。
 「風邪引くなよ」
 「ダメだよ」
 なぜか小夜美は慌ててそのマフラーを取り、智也に戻そうとした。智也は軽く眉をひそめて、小夜美を見つめた。
 「なんで」
 「智也のほうか風邪引いたら大変じゃない。受験生なんだから」
 「その受験生を、この寒空の下に連れだしたのは誰だ？」
 わざと意地悪く智也は笑ってみせる。
 智也はいつもどおり、小夜美の拗ねたような、照れたような笑みを期待していた。しかし、小夜美は真顔になって、智也の顔をじっと見つめた。
 それだけでも不思議だったのに、その瞳にじわっと涙がにじんでくるに及んで、智也は完全に狼狽してしまった。
 「なっ……ど、どうしたんだよ、小夜美？ どっか痛いのか？」
 「……うつん、違う、ごめん」
 乱暴に涙を拭くと、小夜美は智也に背を向けた。
 小夜美の吐く息が、白い。

その後ろ姿が急に心細げに見えて、智也は理由もなく胸が痛んだ。
 「小夜美……？」
 「ごめんね、大事な時期なのに、わがまま云って引っぱり出して」
 「な……お前、そんなの、本気にしてるのか？」
 「ほんとのことだもん」
 「小夜美……」
 智也は小夜美に近づいて、そっとその肩を抱いた。小夜美は一瞬、体をびくっと震わせると、面を上げて智也をじっと見つめた。その瞳には、まだ涙が湛えられていた。
 「智也と、雪の中を歩きたかったの」
 「……俺だって、そうさ」
 「うつん……」
 倒れ込むように、小夜美は智也の胸に顔を埋めた。冷えた体を温めるように、智也は小夜美を強く抱きしめた。
 「焦っちゃダメだって……あたしのほうがいつも偉そうに云ってるのに……、ほんとは、あたしが焦ってるのかもしれない……」
 「……」
 「智也と、ずっと一緒にいたい……。だけど、ほんとにずっと、一緒にいられるのかなって……」
 「……あたりまえだろうが」
 智也は小夜美の頬を両手で挟むと、上を向かせた。そして、驚いて目を丸くする小夜美に、微笑んで見せた。
 「俺は絶対浪人なんかしない。焦りもしないけど……これ以上、小夜美を待たせたりもしない」
 「智也……」
 「ずっと、一緒にいる。俺が、一緒にいたいんだ」
 「……うつん」
 ようやく、小夜美が笑顔を見せた。
 雪の中、かすかに涙を浮かべて微笑む小夜美は、本当に綺麗

麗だと智也は思った。口には、出さなかつたけれど。そのとき、何かに気づいたように、はっと小夜美が息を飲んだ。

「……ああっ」

「ど、どうした？」

「プレゼント」

「は？」

「クリスマスプレゼント。くれないの？」

子供のような笑顔で、小夜美が両手を智也の前に差し出す。

智也は茫然とその手を見つめ、次いで苦笑し、最後に小夜美の頭を軽く叩いた。

「いったあい。なにすんのよ、もう」

「勉強勉強って、怖い家庭教師にずっと部屋に閉じこめられるのに、いつそんなもん買っていくんだよ」

「ちえっ」

「そういうお前は、なんか用意してるのか？」

「あたし？ んーとね……」

小首を傾げる小夜美。智也が、ほら見る、どうせお前も

と、云いかけた瞬間。

不意に背伸びをして、小夜美が智也に唇を重ねた。

「……！」

目が点になった智也に、小夜美がはにかんだ笑みを向ける。

「メリークリスマス、智也」

「……メリークリスマス、小夜美」

腕を伸ばして、智也はもう一度、小夜美を抱きしめた。

「聖しこの夜。真っ白い雪が、恋人たちの上に降り注いでいた。」

あとがき

智也に甘える小夜美ねーさんが書きたかつたんです。たまには難しいこと考えず、萌えだけのSSを書きたかつたというのがあります(笑)。小夜美ねーさんのキャラが変わるとかいう人は嫌いです。それにしても、不意打ちのキスは私の中でブームになっているらしい(笑)。ご感動などいただければ、幸いです。

二〇〇一年一月二四日

Happy, Happy New Year

人を待つのは、嫌いだった。

誰かを待ってひとり立っていると、どうしてもあの雨の日を思い出してしまふ。二度と来ない人を待ち続けた、あの雨の日を。

だから、人を待つのは嫌いだった。だけ。

「はあ……おっせえなあ」

携帯電話のディスプレイを眺めながら、三上智也は大きくため息をついた。

ディスプレイには、「しばらくお待ちください」と表示されている。

智也は、近所にある神社の鳥居の側に立っていた。

時刻は、深夜。ちよつと零時を回った頃合い。

にも関わらず、辺りには多くの人が行き交っていた。

その理由は、今日が元旦だということだ。地元の小さな神社なので、参拝客でこった返すということはないが、それでも初詣の客足は途絶えることはなかった。

そして、そんなときは電話やメールの使用量が多くて、携帯電話はすぐ繋がりにくくなる。そのせいで、さっきから智也は待ち人と連絡を取ることもできず、もう三〇分近くその場所に佇んでいた。

「……つたく、風邪引いたらどうしてくれるんだ。俺が受験生だつてこと、どんだん忘れていつてないかー？」

ぶつぶつと呟きながら、吐く息が白い。智也はポケットに

手をつっ込んで、夜空を見上げた。

暗い空には、冷たい冬の星々が瞬いている。雪が降っていないのが幸いだったが、星の冴え冴えとした輝きが、代わりに寒さを強調しているかのようだった。

そうして星を数えていた智也の表情に、ふと陰りが差した。

もし、彼女が来なかったら。

こうやってまた俺がバカみたいに突っ立ってる間に、彼女もまた、俺の手の届かないところに行ってしまったら。

その想像が智也の胸に錐で刺したような痛みをもたらした、そのとき。

「お待たせっ」

明るいかげ声とともに、思いつきり智也の背中が叩かれた。

「ど、どわっ!？」

「どーしたのよ、ぼんやり夜空なんか見上げちゃって。似合わないよ? あ、もしかして、淋しかったのかな、少年?」

「バカ野郎、散々待たせておいて……」

智也の胸に浮かんだ不安など吹き飛ばしてしまう、相変わらず軽快な台詞。その声の主である年上の恋人、霧島小夜美を、智也もいつもどおり怒鳴り返そうとして振り返り

。絶句、した。

「ごめんごめん、やっぱり慣れないからさ、着付けに時間がかつちやっ。早く歩けないし、これだと」

そう云って、照れたように笑う小夜美は、振り袖姿だった。赤を基調にした、艶やかな柄だ。小夜美の普段の服装はシックなものが多いだけに、よりいっそう、華やいで見えた。

「途中で何度も電話したんだけどね、繋がらなくて……つて、どうしたの、智也?」

言葉もなく、じっと見つめている智也に、小夜美は小首を傾げて見せた。

見とれていた、と自分で気づいた智也は、赤面したのを隠すため、乱暴に面をそらした。

「こんなときに携帯使えないの、わかりきってるだろ。もっと考えろよ」

「……ごめん、先に連絡しておけばよかったね。驚かせたいなっと思って」

智也のぶっきらぼうな口調はいつものことだったが、このときは小夜美も遅刻したのを気にしていたせいか、暗い表情になっつつむいてしまった。

他愛のない口げんかに慣れて、俺は小夜美の明るさに甘えているのかも知れない、小夜美のそんな表情を見て、智也はふと自分を省みた。

小夜美は、淋しげに呟いた。

「こんなの、着てこなければよかった？」

「……バカ」

云いながら、智也は小夜美の手を取った。面を上げた小夜美の瞳を、じっと見つめる。

「嬉しいよ。……その、似合ってる」

最後のほうは、顔を赤くして口ごもるような調子になってしまった。

綺麗だよ、と本当は云いたかったのだが。

自分の不器用さに、智也は内心、舌打ちした。

しかしそれでも、小夜美は喜んで、花のような笑顔を浮かべた。

「えへへ……ありがとう」

「……さ、早く行こうぜ」

「うん」

手を繋いだまま、二人は歩き出した。

短い参道を歩き、本殿の前までやってくる。そこでふと小夜美が顔を上げ、智也に話しかけた。

「ねえ、智也」

「ん？」

「今年もよろしくね」

子供のような笑顔。

ずっとそばにいることを、ただ当たり前のように信じて。

「……ただ、それがどんなに貴重なことであるか、誰より知っ
ていて。」

だから。

「ごちそうさ」

智也は微笑んで、頷き返した。

人を待つのは、嫌いだった。

「……ただ、今は。」

失うことだけを恐れるのではなく、この笑顔とともにありたいと、ただ素直にそう考えることができる。

だから、この笑顔をいつも、待ち続けている。

了

あとがき

謹賀新年。

イベントは大切にしなきゃね、ということを書き続けていたこのシリーズ（シリーズだったのか（笑）ですが、これで一段落かな？

…：… と思ったら、まだバレンタインとか、卒業式とか色々ありますね。ネタがあれば、頑張りますー。萌えだけで書くのって、結構難しい（笑）。ご感想などいただければ、幸いです。

二〇〇二年一月一日

Happy, Happy Valentine

小夜美はいつもわたしのことを、マイペース過ぎるって言うけど、小夜美自身だって、ぜんっぜん人のこと云えないと思う。むしろ突発的な行動に巻き込まれているのは、いつもわたしのほうじゃないかしら？

今日だって、大学でいきなり捕まって、「チョコの作り方教えてっ！」だもんなあ。

気持ちはわかるけど、どうせならもっと早く準備すれば？ 今日、十三日だよ？

……それに、そもそも。

「ねえ、小夜美」

「んー？ なぁに、静流」

いかにも生返事、という声が返ってきた。

振り向くと、小夜美はわたしの本棚から取り出してきたお菓子の本を片っ端からめくっている。トッピングのいいサンプルを探してるらしい。

「……うーん……これかなあ……でもやっぱりマイチ……えーと、こっちは……」

ほんと、見ていて飽きないぐらい、表情がよく変わる。

黙ってれば、むしろわたしより年上に見える顔立ちをしてると思うんだけど。あまりにストレートに感情を表すから、時々、すぐ子供っぽく見える。

それが、わたしにとってこの親友のいちばん好きなところで……いちばん、羨ましいところだ。

「んー、なに、静流？ 人を呼んどいて、無言で見つめないでよ」

本を下ろして、小夜美はわたしをいぶかしげに見返した。わたしは苦笑しつつ首を振る。

「あ、うん、ごめんごめん」

「ま、あんまり綺麗だから、同性でも見とれちゃうってのはわかるけどねー」

「はいはい。なんたってビョーリホー女子大生だもんね」

「……なんか引くかかる云い方だけど……ま、いいや。で、なんなの？」

「うん。なんで突然、わたしにチョコの作り方なんて習いに来たの？ 小夜美、料理得意だし、チョコぐらい作れるでしょ」

「うーん、まあ、それはそうなんだけど」

そう云うと、小夜美は少し頬を紅くして、上目遣いにわたしを見た。照れたように、頭をかいている。

「やつぱ、お菓子じゃ静流には叶わないから。どうせあげるなら、そこらで売ってるのとは、ひと味もふた味も違うもの、作ってあげたいじゃない」

「なるほど……。いいわね、相変わらずラブラブで」

「そっ……そんなんじゃないけど」

耳まで紅くなつて、小夜美は本で顔を隠した。

……ほんと。羨ましい。

「あ、これこれ。これ、いいな。これにしよう！」

慌てて小夜美が本を開いて差し出してくる。照れ隠しで適当に選んだにしては、いい感じだった。この子、センスはいいんだ、ほんとに。

「わかった。じゃ、始めようか」

「うん！ ……あ、静流も作ってね」

「……え？ どうして？」

「上手にできたほう、持っていくから」

満面の笑顔で、しゃあしゃあとこんなことを云ってくれる。

わたしは一つ技でもかけてやるうかと思っただけど、純な恋心ゆえ……と精一杯好意的に解釈して、肩をすくめるだけですませてあげた。

*

「よし、完成っ」
 「うん、上出来じゃない」
 数時間後。わたしたちは完成したチョコを前に、歓声を上げた。

結局、わたしも一緒に作っていた。小夜美の腕なら、わたしが手伝うこともほとんどないし、なんと云ってもお菓子を作っているだけで楽しい。……あとで自分で平らげるのは、ちよつとわびしいかもしれないけど。

「じゃあ、わたし、後片づけしてるから。小夜美、ラッピングしちゃいなよ」

「ほんと？　ありがと。ごめんね」
 「どういたしまして」

云いながら、わたしは洗い物を始めた。

チョコを作っている間も、今、ラッピングをしているときも、小夜美はほんとに幸せそうに笑っていた。

……わたしは、彼女のいちばんつらかった時期を知っている。あの小夜美が、笑うことをすっかり忘れてしまっていた、あの頃のことを。

だから、今こうして笑顔の小夜美を見られるのは、本当に嬉しい。よかった、と心から思える。

だけど、もうちよつと気を遣ってくれてもいいわよね。
 わたしはついつい苦笑してしまった。

お菓子作りは本当にそれだけで楽しいけれど、誰かのために作るなら、きつともっと楽しい。

愛するひとのために作るなら……それは何より……。
 頭を軽く振って、つい浮かんだそんな考えを振り払った。

もうそれは、考えないと決めたことだ。

「静流」

「え？」
 呼びかけられ、わたしは洗い物の手を止めて振り返った。
 すると、小夜美が満面の笑顔で、綺麗にラッピングした包

みを差し出していた。

「はい、これ。静流の分」

「……え？」

つい受け取ってしまったあと、茫然とその包みを見つめた。
 どういう……？　つもりなんだろう？

顔を上げたわたしの視線は、少し咎めるような色があったかも知れない。

小夜美は変わらず微笑んでいた。けれど、その瞳には、少し悲しげな驕りがあった。

「渡してあげなよ」

「小夜美……」

「好きだって気持ち、ずっとしまっておくんだって静流が決めたのなら、あたしは何も云わない。でもさ、言葉にできないなら、せめて何か形にしてあげようよ。じゃないと……？　つらいだけの恋になっちゃうよ」

「……」

「そんなの……悲しすぎるよ……」

彼女の笑顔が崩れて、だんだん、涙が浮かんでくる。

だから、わたしに無理矢理チョコを作らせて。

だから、こんな前日になって。

だから。だから、わたしは、この親友が、大好きなんだと

思う。

「うん。……わかった。ありがと、小夜美」

わたしも涙目になってしまったけれど、精一杯の笑顔で頷いて見せた。

それに対して、小夜美は。

「……うんっ」

やっぱり、子供のように、笑ってくれた。

小夜美から渡された包みを、そっと胸に抱いてみる。

なんと云って渡そう。……やっぱり、「妹にいつも優しくしてくれるお礼」とでも云うしかないかな。

だけど、それでも。わたしの想いを彼が受け取って、そし

て、おいしいと云ってくれたなら。
それはきつと、とても幸せな聖バレンタイン

。

end

あとがき

萌えだけで書くのはやはり難しいので(笑)、今回はちょっと趣向を変えてみました。
静流ねーさんメインになっちゃったので、epsに入れてるべきかもしれないですが……まあ、これまでのシリーズと同じ流れを汲んでいますから。
さて、どこまでイベントネタで続けられるでしょうか(笑)。
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇二年二月一四日

Happy, Happy Graduation

春は駆け足でやってきた。

三月になってから急に暖かくなり、下旬の今では、すでに桜が咲き誇っている。

ここ、澄空学園の校庭の桜も、見事な満開だった。

時折吹く風に、薄紅色の花びらが舞う。その様を、樹の下に立つて、じっと霧島小夜美は見上げていた。

口元にはかすかに笑みが浮かび、けれど、瞳には隠しような憂いを湛えて。

来る春を喜ぶように、去りゆく冬を悼むように。

そんな小夜美を、校門のそばからは、三上智也が見つめていた。

いつも子供のように笑う彼女が、時折見せるその表情。それがいつも、智也を切なくさせた。

今はいない誰かを想うこと。その気持ち、誰より智也にはわかってしまうから。

そのまましばし声をかけることもできずに智也は立ち尽くしていたが、やがて小さくため息をつく、小夜美のそばに歩いていった。

「……よ、小夜美、お待たせ」

「あ……うん」

智也に気付くと、小夜美はいつもどおりにこやかに微笑んだ。

そこには、先ほどまでの陰りはない。

傷みを抱えて、それでもそんな風に笑える小夜美を見るとき、智也はいちばん「歳の差」を感じてしまう。俺はこんな風に笑えているだろうか、と。

「うめん、呼び出したりして」

「まったくだ。それもよりによって学校なんて。ムードも何もないな」

「あはは……。そうだね、でも、どうしてもここで云っておきたいことがあって」

「云っておきたいこと？」

「……うん」

小さく頷くと、小夜美はそのままうつむいてしまった。言葉を探すように、智也の足元をじっと見つめている。

智也は促しもせず、小夜美の話を待った。

やがて、小夜美が顔を上げた。微笑もうとして、けれど、あまりに瞳が真剣すぎて、失敗してしまっ

「別れよっか」

「……」

智也は何も云わず、一步、小夜美に近づいた。

瞳をまっすぐに見つめてくる小夜美から目をそらすことなく、ゆっくり智也は腕を伸ばし、小夜美の頭を、軽く叩いた。

「いたっ、何すんのよ、もう！」

「……お前こそ、何云ってんだ」

心底呆れきった表情で、智也は肩をすくめた。小夜美は頬を膨らませて、智也を軽く睨む。

「ちえっ。ちよつとは動揺しなさいよ」

「脈絡もなくそんな話されて、真に受けるバカがいるか」

「つまらないのー」

云いながらも、小夜美は笑っていた。今度こそいつもどおり、子供のような笑顔で。智也もつい、笑みを返してしまう。

「で、ほんとの話は？」

「うん……あのね」

少し強めの風が吹く。小夜美は髪を押さえながら、智也に向き直り、微笑んだ。

「卒業、おめでとう」

「……はい？」

「今度もまた、智也は目が点になる。しかし、小夜美の言葉は今度は冗談ではないようだった。」

「……って、今更、何を？ 卒業式は二月にやったし……お祝いだって、してくれなきゃないか」

「うん、そうなんだけどさ……」
言葉は切って、小夜美は校舎のほうに目を向けた。学校全体をゆっくりと眺め渡していく。

「卒業式のときは、あたし、ここに来れなかったし。智也が澄空^{スミ}を出る前に、どうしてもここで、おめでとうって云いたかったんだ」

「小夜美……？」
「色んなこと、あったよね」

その短い呟きで、智也は小夜美の云いたいことがわかったような気がした。

智也もまた小夜美の隣に並び、校舎を眺めた。

「そうだな」
「うん……」

小夜美が智也に寄り添ってくる。そして、視線は校舎に向けたままで、言葉を続けた。

「悲しい想い出も……ここにはあるんだ」
「……」

「だから、お母さんの代わりに購買で働くのも、ほんとに抵抗あったの。今だから云えることだけだね」

「……そっか」

「でも……そのおかげで、智也に逢えたんだね……」
再び強めの風が吹いた。髪を押さえる小夜美をかばうように、智也が風上に背を向ける。小夜美ははにかんだ笑みを、智也に向けた。

「ありがとう。……だからね、最後に智也と一緒に、ここへ来たかったの。ここで智也におめでとうと……ありがとうを、云いたかった」

「……バカだな」

感謝の言葉は、自分が云いたかったことなのに。どれだけ傷つけても、ただそばにいてくれたことを。

智也はここが校庭であることも一瞬忘れ、小夜美を抱きしめそうになった。伸ばしかけた手のやり場に困り……ふと、小夜美の髪に桜の花びらがついているのに気付いた。

そっと優しい仕草で、智也がその花びらを取る。そのまま二人の前に掲げると、小夜美は嬉しげに微笑んだ。

「あは。可愛い」

その笑顔を、智也は真剣な表情でじっと見つめた。視線に気付き、小夜美が不思議そうに首を傾げる。

「……さつき、実はちょっと焦った」

「さつき？ ああ……」

くすつ、と小夜美がいたずらっぽく笑う。けれど、智也は真剣な表情のままだった。

「桜を見ていた小夜美は……淋しそうに見えたから……そのまま……消えてしまえば……」
「智也……」

わずかに目を丸くすると、小夜美はまた満面の笑みを浮かべた。智也が愛してやまない、子供のような笑顔。

「バカね。どこにも行かないよ」
「……」

「智也こそ……」
「……え？」

「智也は……ずっと一緒にいてくれるんだよね？」
「……」

「……今度こそ、智也はここがどこであるかを忘れた。春休み中とは云え、教師が学校にいる可能性は高かったし、部活で登校している学生もいるはずだったが、知ったことではなかった。」

智也は腕を伸ばし、小夜美を強く抱きしめた。

「ああ……ずっと、一緒だ……」
「うん……」

強い、春の風が吹く。

た。満開の桜は、惜しげもなくその花びらを風に舞わせてい

end

あとがき

大学の卒業式が三月だったんで、私の中で卒業式という三月、というイメージができあがっていたんですが……よく考えると、高校の卒業式は二月なんですよ(笑)。この作品のネタ自体は、少し前からあったんですが、この事実に気付いたときは、すでに二月は終わっていたという……。まあ、でも、本作の主題は「桜の下に立つ小夜美ねーさんを書くこと」だったので、いつか、と(笑)。学校を離れる直前の感傷、みたいなものも表現できているといいのですが。イベントシリーズは(ホワイトデー抜きしちゃったけど)、一応今度こそこれで一区切りです。あとは同じ行事の繰り返しになるので、ほんと、ネタがあればってことで……。感想など、いただければ幸いです。

二〇〇二年三月二三日

今夜、月の見える丘で

季節は晩秋。心地よい風が、腰まで伸ばした長い髪をなびかせる。霧島小夜美は手を軽く挙げて髪を押さえつつ、立っていた。

花屋の前だ。やがて店員が大きく、華やかな彩りの花束を抱えて奥から出てきた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

微笑んで受け取り、代金を払って小夜美は踵を返した。店員の青年が、少し頬を赤くして見送っている。

しばらく歩いたところで、小夜美はひとりの少女に気づいた。交差点で信号待ちをしている。ややうつむき加減で、暗い表情をしているように見えた。

小夜美はその少女に並び、横顔を窺った。少女は小夜美より、まず大きな花束に気づいて横を向き、それから小夜美を見て目を丸くした。

「あ……」

「あ、やっぱり。えーと……音羽さん、だっけ。智也クンの友達」

「あ、はい、霧島さん、こんにちは」

そう云って、少女 音羽かおるは軽く頭を下げた。そして顔を上げたときには、先ほどまでとは全く違う笑顔を浮かべていた。

笑顔を返しつつ、小夜美はどうしてもその表情に「演技」を感じてしまった。

「小夜美でいいよ。お出かけ？」

「え、ええ、映画を見た帰りで……」

そこまで口にしたとき、再びかおるの表情を憂いがかすめ

たが、またすぐに笑顔を作った。話題をそらすように、小夜美が抱えている花束に注目する。

「わあ、すごい花束。何かのお祝いですか？」

「ああ、これ？ ……ううん、お墓参り」

「……え？」

屈託のない小夜美の口調と、その口にした言葉があまりにちぐはぐで、かおるは言葉を失ってしまった。だが、小夜美が小首を傾げると、慌てて頭を下げた。

「ご……ごめんなさい、私……」

「あ、いいのいいの、気にしないで。変よね、こんな派手な花束持ってお墓参りなんて」

「い、いえ、そんな……」

「でも、いつもいつも辛気くさい花じゃきつとつまらないから。そういうの、嫌いな子だったし」

小夜美は微笑んだままだったが、どこか淋しげであることをおおるは感じ取った。そしてその言葉から、小夜美が足繁くそのひとの墓前に足を向けていることもわかった。そのひとがどれだけ大切な存在であったかも。

「恋人……ですか？」

気づいたときには、かおるはそう口にしてしまっていた。小夜美は怪訝そうにかおるを見たあと、小さく苦笑した。

「弟よ」

「あ……弟さん……。ご、ごめんなさい、私、ほんとにどうかして……」

「そのころたえ方のほうが、どうかしてると思うけど」

くすくすと笑いながら、小夜美は答えた。かおるは赤面して言葉もない。

信号が、変わった。かおるはそれを幸いと、歩き出そうとした。

「じゃあ、これで失礼します。ごめんなさい、ほんとに」

「……あ、待って」

かおるの背に、小夜美が声をかけた。かおるは横断歩道に

踏み出しかけた足を止めて、振り向いた。

「何か、あったの？ こういうところで会ったのも何かの縁だから、話してみない？ おねーさんが相談に乗ったげるよ」

ついそう云ってしまったのは、小夜美の生来の世話好きな性格のせいもあったろうが、やはり「智也の友達」ということが大きかったかもしれない。弟のような彼の。

かおるも小夜美の態度に、冗談めかしてはいたが、いたわりを感じ取っていた。

何より、彼女なら彼の気持ちがかかるかもしれない。失った人に想いを残すというのが、どういうことか。そう思い、かおるは話をしてみたい衝動に駆られた。

そして、信号は再び赤になった。

*

「……今日は、智也と一緒にだったんです」「智也くん？」

ふたりは手近な喫茶店に入っていた。

かおるの言葉に、小夜美は口元にカップを運ぼうとした手を止めて、少し驚いた表情を作った。

「音羽さんは、智也くんときあつてるの？」

「……いえ、そういうわけじゃ……」

「ふーん？ でも、仲いいんだね。あたし、てっきり智也くんは唯笑ちゃんと……、あ……」

「ごめん……」
思わず口を滑らし、小夜美はバツが悪そうな顔をして謝った。かおるは苦笑しつつ、首を横に振った。

「私もそう思っていました。でも……そうじゃなかったみたいですよ」

「？」

かおるは表情を曇らせてうつむいた。

かおるが智也に好意を持っていることは、小夜美にもわかった。それなら、智也と唯笑に恋愛感情がないことは、喜ば

しいことではないのか？

疑問を抱きつつ、小夜美は黙って話の続きを待った。

「智也には……忘れられないひとが、いるんです」

「……」

「もうそばにはいないそのひとを……今でも……」

「……」

唇を噛んで言葉を途切れさせたかおるを、小夜美はじっと見つめた。心臓が、大きく高鳴っていた。

「そばにいない」その言葉の意味が、なぜだか小夜美にはわかりすぎるほどわかってしまった。

少し青ざめた小夜美の様子に、うつむいたままのかおるは気づかず、ややあつてようやく話を続けた。

「私……実は転校してくる前に、つきあっていたひとがいて……。ちょっとしたことでも気持ちがすれちがって、うまくいかなかった……」

「……」

「そのことをずっと後悔してた……。でも、智也に会って、もう一度、恋をしたいと思ったんです。過去を振り切って、もう一度……」

「……」

「だけど、私は……智也にとって、そういう存在になれなかったみたい……」

膝の上で重ねた手を、かおるは強く握りしめた。涙をこらえて、肩が震えている。

その姿に、小夜美は激しく胸が痛んだ。

かおるの気持ちは、とてもよくわかる。愛しいひとの心の中に、自分ではない誰かが常にいること。それがどれだけ悲しいことか。

けれど、智也の気持ちもまた、小夜美には痛いほどよくわかってしまうのだ。忘れることのできない、その想いが。

「音羽さんは……智也くんが、そのひとのことを忘れたほうがいいと思う？」

「……」

「え……」
 ストレートな問いかけに、かおるは戸惑って視線をさまよわせた。それはあなたの「工」だと、責められているような気がした。

しかし、顔を上げると、小夜美はむしる悲しげに、泣き出しそうにも見える表情を浮かべていた。

「小夜美さん……？」

「……弟がね、事故に遭ったとき」

小夜美はかおるから目をそらし、窓の外を見た。独り言のように言葉を続けるその横顔は、理由もなく、かおるの胸を締め付けた。

私は、触れてはいけないことに触れてしまったのかもしい。一瞬、かおるはその後悔した。

「その日の朝、あたしが学校に行こうとしてたら、玄関で弟に呼び止められたの。『小夜美姉』って」

「……」
 「あたしが『何？』って訊いても、弟は何も云わなくて……。その頃、あたし、色々嫌なことがあってね、苛々してたんだと思う。『忙しいんだから』って云って、そのまま学校に行っちゃった」

「……」
 「学校に着いたら、すぐ連絡があって……。弟が事故に……。って……」

小夜美は目を閉じて、言葉を切った。込み上げる思いに耐えていることを、震える睫毛が示していた。

「あのとき、弟が云いたかったことは何なのか……。ずっとずっと、考えてる。わかりっこないんだけど。でも、絶対に忘れちゃいけないことなんだって……。そう思うの」

「小夜美さん……」

「忘れちゃいけない想いつていうのも……。あると思うんだ。忘れることだけが、前へ進むことじゃないよ」

かおるのほうに向き直り、小夜美は静かにそう云った。か

おるは小さく頷いた。

「うん……」
 「もちろん、過去うしろばっかり見てちゃ話にならないけどね。そういつときは、ひっぱたいてでも前を向かせなきゃ」

「……うん」

小夜美の大きく平手打ちをするポーズに、かおるは目を瞬いた。そして、思わず吹き出してしまった。その笑顔を見て、小夜美も柔らかく微笑んだ。

「そうですね。私、焦りすぎてたのかな」

笑いを治めて、かおるは咳いた。その表情は、幾分晴れやかなものになっているようだった。

その姿に安堵しつつも、小夜美はいくらか苦い気持ちを抱いていた。

*

「それじゃ失礼します。ありがとうございました」

「ううん、あたしのほうこそ、引き留めちゃってごめんね」

喫茶店の前で、ふたりは別れることにした。

小夜美の言葉に、かおるが笑顔で首を振る。

「とんでもないですよ。また、購買に来てくださいね。男の子がきつと心待ちにしています。……。智也も」

「あはは。ありがと」

もう一度頭を下げて歩き去るかおるを少し見送って、小夜美も歩き出した。

墓地へ向かうその表情は、やや硬く、唇を噛んでいた。

やがて、人気のない霊園に小夜美はたどり着いた。弟の墓前に花を置き、手を合わせる。その面は、はっと胸を突かれるほど悲しげだった。

「忘れちゃいけない想いもある……。か。また綺麗事云っちゃったね。怒ってる？ 智……」

墓石が何も答えるはずがない。わかり切っていたことだけ

れど、それでも小夜美は墓碑に語りかけ続けた。

「相談に乗ってあげる、なんて云って、姉ちゃんさ、ほんとは自分に言い聞かせていただけなのかもしれないね。こうして過去に囚われたままの自分に、一所懸命言い訳してただけなのかも……。ごめんね、智、ごめん……」

こらえきれず、小夜美の瞳から涙があふれた。

あのとき、弟から聞けなかった言葉。それがなんだったのか、永遠に得られないその答えを想うたびに、小夜美の胸は痛んだ。そしてその痛みを抱いていくのが、償いなのだと思っていた。だから、忘れてはいけない。

しかし、忘れてはいけない、そう自分に言い聞かせるのは、本当は忘れたいと思っているからなのかもしれない。そう考えると、あまりの罪深さに我が身を呪いたくなかった。

晩秋の高い空の下、小夜美はただ静かに涙を流していた。

*

「……ごめんね、智。また泣いちゃった」

どれだけの時間が経った頃だろうか。西の空から少しずつ夕焼けが広がり始めていた。

小夜美は涙をぬぐって立ち上がり、墓碑に向かって微笑んだ。

「また来るね」

最後にそう云って、小夜美は歩き始めた。霊園の出口へと向かう。その途中、小夜美はある墓碑の前で、見覚えのある少年が立ち尽くしていることに気づいた。

「……智也くん？」

「……え？」

ふいの呼びかけに振り向いたのは、間違いない三上智也だった。こんな場所で知人に会うことが、心底意外そうに目を丸くしている。もっとも、それは小夜美も同様だったが。

「小夜美さん」

「お久しぶり。智也くんもお墓参り？」

「……もってことは、小夜美さんも？」

「散歩には来ないでしょ」

冗談混じりに答えながら、小夜美は智也の背後にある墓碑銘を見た。「桧月」という字が見える。

さきほどのかおるの話を、小夜美は思い出した。

「もしかして……昔、好きだった娘？」

「小夜美さん……どうして？」

さらに驚いて、智也はほとんど目を見開いていた。無理もない。小夜美は小さく微笑みつつ答えた。

「さっき、音羽さんに会ったの。ちよつと話聞かせてもらっちゃった」

「ああ、かおるに……そっか……」

智也の表情に、鬨りが差した。

小夜美はかおるの気持ち智也に伝えるべきかどうか、迷った。過去を振り切って、かおるを見てやれ、などということには自分には云う資格はない。けれど、女として、かおるの力になってやりたいと思う。

奇妙な沈黙を破ったのは、結局、智也のほうからだ。

「かおるには……つらい想いをさせたと思う……」

「智也くん……」

その智也の言葉の意味は、今はかおるを愛せない、ということだろう。そうわかったから、小夜美は思わず口を開いていた。

「音羽さんは……智也くんのこと、真剣に想ってるよ」

「わかってる。わかってるけど……俺は……」

言葉を詰まらせ、智也は後ろを振り返った。墓碑をじっと見つめる。小夜美もまた智也の背中越しに、その墓碑を見つめた。

「忘れられないの？」

愚問だ、と小夜美は思った。忘れられないから、こうして今ここに立っている。彼も、あたしも。失くしたものの重み

に、足を取られたままで。

しかし、智也の答えは、小夜美の想像とは少し異なっていた。

「忘れちゃいけないんだと思ってた……。でも、そうじゃなくて……。俺が……。忘れたくないんだって、わかった」

「え……？」

小夜美は智也の横顔に視線を転じた。相変わらず墓碑にじっと眼差しを注ぐその顔は、しかし、後悔や失意に彩られてはいなかった。

「無理に忘れようとしたり……。忘れちゃいけないと思ったり……。そんな不自然なこと、しなくてよかったですよ。俺が、彩花を忘れたくないと思ってるんだから。彩花と一緒にいたいんだ、俺は」

「……」

「それが今の俺の……。正直な気持ちなんだ」

あの日と同じような雨に打たれて、そして智也は気づいた。忘れたくない、と。

いつか誰かを愛するかもしれない。だけど今は。今はまだ、彩花の思い出と寄り添っていたい。

過去に囚われるのではなく、自分からそうすることを選んだのだ。

その静かな決意は、小夜美の心の何かを激しく揺さぶった。

「それで……。いいのかな……」

うつむいて、小夜美が呟く。うなだれているようにも、見えただろう。

小夜美に背を向けたままの智也は、小夜美の様子には気づかず、答えた。

「いいも悪いもないさ。それが今の俺には、自然なんだもの。……って、小夜美さん？」

微笑みつつ振り向き、智也は三度驚きに目を開いた。
「ど、どうしたの？ 俺、なんか変なこと云った？」

「……ううん」

小夜美は、涙を流していた。静かな涙が、止めどなく頬を伝う。

けれど、面を上げたとき、そこには笑顔が浮かんでいた。
「ありがとう、智也くん」

「な、なにが？」

智也は狼狽するばかりだった。小夜美は笑いながら、涙をぬぐった。

「お礼に、取り置きパンに今度からウニパン混ぜてくれるよう、お母さんに頼んどいてあげる」

「なっ……。それって嫌がらせじゃない？ 俺、やっぱりなんかひどいこと云った？」

蒼白になった智也を後目に、小夜美はさっさと歩き出していた。智也が慌てて後を追う。

「ねえ、小夜美さんってば……」

「ご飯食べて帰ろっか。おねーさんがおこっただけよ」

「……。なんか怖いんですけど……」

「あっそ。じゃあ家でひとりラーメンでも食べなさい」

「あ、うそうそ、小夜美さん！」

「……。え？」

「なんでもないよ」

微笑んで、小夜美は空を見上げた。暮れてゆく空に、薄い月がかかっている。

忘れてはいけない、そう思っていた。償いのために、忘れることは許されないと。

でも、本当はそんなことではなかったのだ。いつまでも胸が痛いのは、弟を愛していたから。忘れてはいけないのではない。忘れたくない。つらくても痛くても、この想いを抱いていたいから。

そのことがやっとわかった。だから小夜美は、微笑んで夜空を見上げていた。

どこか透明感のあるその横顔の美しさに、智也は言葉も失くしてしばらく見とれた。しかし、自分でそのことに気づいて、照れたように、小夜美と同じく夜空へ目を向けた。

そのままの姿勢で、ふたりは長い間、ぼんやりと月を見ていた。

今はいない誰かを想うふたりは、それでも鬨りのない笑みを浮かべていた。

了

あとがき

「かおるシナリオに失敗して彩花エンドになったあとの小夜美ねーさんのお話」です。わかりにくいシチュエーションですみません(笑)。

今回は、メモオフのテーマを正面から否定するような話を書いてしまいました(笑)。でも、作中の小夜美ねーさんの台詞「忘れることだけが、前へ進むことじゃないよ」、これは本当だと思うので。囚われていなければ、無理に忘れる必要はないと思うんです。

さて、この作品は有志によるメモオフ同人誌「Eternal」に寄稿したものです。小夜美ねーさんの魅力が、少しでも伝えられているといいのですが。

ご感想など、いただければ幸いです。

追記

これを書いたあと、設定資料本が発売になって、いきなり「小夜美ねーさんの弟の名前は克也」という設定が明らかになり、頭を抱えました(笑)。でも、もう書いたものだし、「智」という私の案のほうの方が利いてるだろうと思って直しませんでした。志菜乃ねーさんの弟も「和也」だし、もうちょっとひねれよ♡キッド、と、正直、思いますよね？ ね？

二〇〇一年七月一六日

Sweet, Sweet Whisper

弟みたいだって、ずっと思ってたよ。

…「ごめんごめん。蒸し返すようなこと云って。

あ、ちよっと！ 待ちなさいよ、少年！

話は最後まで聞くこと！

えーと…：…なんだっけ？

あ、そうそう、智也クンのこと、弟みたいだって思ってた。

克也は…：…突然、いなくなっちゃったから…：…、

また突然、戻ってきてくれたみたいで…：…嬉しかったの。

でも…：…でもね。

本当は、わざとそう思い込もうとしたのかもしれない。

だって、あたし、智也クンより三つも年上なんだよ？

智也クンには、可愛い幼馴染みもいるしさ。

弟みたいだって思うことで、あたしは、自分の気持ちにブレ

キかけてたのかも。

…：…君は、そんなのお構いなしで、飛び込んできたけどね。

…：…あはは、どうせガキだからって？

…：…そんなんじゃないよ。だって、

…：…嬉しかったんだから。

…：…

…：…

…：…

ちよっと。

何ぼけっとしてるの？

また、あたしからキスさせる気？

あとがき

露崎さんのHP【戯言】に投稿させていただいたものの再録です。

あちらは掲示板形式なので、だいぶ流れてしまったから、こちらにも収録させてもらいました。

「萌え」というリクエストに応えたものであって、自発的にこういう世界に浸っていたわけではない…：…です、たぶん(笑)。

ご感想などいただければ、幸いです。

二〇〇二年一月四日

Happy, Happy Birthday II

よっ、久しぶり。

元気だった？ 克也。

…… あは、何云ってるんだろ、あたし。
元気なわけないよね。

姉ちゃんね、今日で二十二になったよ。

…… あー、『もう立派なおバサンだ』とか思ってるでしょ。
可愛くないなあ。

…… あんたは…… ずっと…… 十五のままだね……。

あんたのこと置き去りにして、
自分だけが歳を重ねていくのが、
すごくつらかった。

でも、今は違うよ。

一緒に歩いてくれる人がいるから。

その人と一緒に、日々を過ごしていくことが、
とっつても幸せだと思えるの。

こんな姉ちゃんを…… 許してくれるかな、克也……。

…… そろそろ行かなきゃ。

今日もデートなんだ。へっ、いいだろー。

また、来るからね。

…… 来てもいいよね？ 克也……。
…… 来てもいいよね？ 克也……。
…… 来てもいいよね？ 克也……。
…… 来てもいいよね？ 克也……。

あとがき

イベントシリーズは終了しましたが、小夜美ねーさんの誕生日に何もナシってのは自分が許せないので(笑)。
ちよいと視点を変えてみました。萌え萌えを期待した方はごめんなさい(笑)。
ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇二年五月三日

end

